
母乳除霊師は
恋を知らない
～元クズイケメンですが、
母乳で除霊100体しないと
元の世界に帰れません～
第2巻

# 第十二話　東部鎮霊局隊長　神崎蒼士。

九条から神格級悪霊の討伐命令を受けた蓮と朔臣は、指定された会議室へ足を踏み入れた。

円卓を囲むように並べられた椅子には、既に見知った顔が揃っていた。

「隊長！　蓮さま」

「武田さん！」

最初に立ち上がったのは武田だった。

右腕にはまだ包帯が巻かれているものの、いつもの人懐っこい笑みは健在だ。

「怪我の具合はどう？」
「あの程度、なんてことはありません」
「腕へし折れてたじゃん」
「もうほぼ全快ですよ！」
むんっ！　と拳を握って見せる武田に、蓮は胸を撫で下ろして笑う。
「蓮さま、ご心配をお掛けしました」
「浅井さん……」
「私はまだ全快ではありませんので、あまりこき使わないでくださいね」
「俺がいつこき使ったんだよ」
浅井も穏やかに微笑む。
頬の傷はまだ薄く残っているが、飄々とした表情はいつも通りだった。
「叙任式に参加できず、申し訳ありません」

「いいよ武田さん……全く嬉しくない称号だし……」
「ぶふっ」
「浅井さん……」
「す、すみませ……！　お許しください、聖乳さま……っく、くくくっ」
じろりと浅井を睨みつつも、蓮は内心ホッとしていた。あ、やっぱ『聖乳』っておかしいよな、と。
朔臣は「いい称号だ」と真面目な顔をして言うし、武田は気を使っているのかあまり言及してこない。
しかし、浅井がこうやって笑い飛ばしてくれると、自分の感覚が普通なんだと安心できる。
「浅井。何がおかしいんだ。蓮に相応しい称号だろうが」
「隊長、やめてくださいよ！　これ以上笑わせないでください！」

朔臣はやはりどこかズレていて、それがまた浅井のツボにハマるらしい。
浅井の腹をかかえて笑う声に、緊張続きだった蓮の肩の力が抜けた。
「すまない、待たせたね」
「景臣(かげおみ)さん！」
奥の扉が開き、景臣が静かに姿を現した。
西部鎮霊局で別れて以来だった。式典用の装束に身を包んだ景臣は、あの戦いが嘘だったかのように穏やかな笑みを浮かべている。
「お前は呼んでない。西部へ帰れ」
「朔くん、意地悪言う子はフラれるよ」
「ふん、俺はフラれない。何故ならもう蓮とは恋仲になったからな」
「ええっ⁉　いつの間に⁉」
「誰が言うか」

やいやいと戯れる兄弟を尻目に、武田と浅井はこそっと蓮に耳打ちした。
「……俺、隊長があんなに浮かれているの、初めて見ました」
「ですねぇ。表情筋は死んだとばかり思ってましたが、ずっとお花が飛んでいますね」
「え、そんな顔に出てる？」
「「ええ、それはもう」」
旧知の仲のふたりがしっかりと頷くので、蓮はそうなのかと納得するしかない。
蓮の目には、朔臣は普段通りに見えるのだが、あれで花が飛んでいるとは驚きだ。
「ふたりはその……偏見とかないの？　男同士なんてさ」
蓮は至極真っ当な疑問を尋ねる。

令和の世ですら、まだ同性愛はマイノリティだ。
それが大正のこの時代、とても受け入れられるものではないだろう。
しかし、ふたりは実にあっさりしていた。
「隊長が蓮さまにひとめ惚れしていたのは、誰の目にも明らかでしたからね」
「ものすごくわかりやすかったですよね」
「俺は隊長を幼い頃から知っていたので、なんだか感動してしまいました……。あまり子どもらしい幼少期を過ごされてはいませんでしたから」
「ああ、武田さんはそうですよね。私は帝都に配属されてからの隊長しか知りませんが……なんというか、人間味に欠ける方という印象でした」
蓮の知らない朔臣の話は、とても興味深かった。
どさくさ紛れに朔臣が言った「ひとめ惚れだった」という言葉は、どうや

ら真実のようだ。

「あのさ、これからはふたりと組んで悪霊を祓うんだよな？」

九条から討伐隊の人選は任せると言い渡されていた。それなら、と蓮が指定したのは、武田と浅井だった。

「ええ、武田さんは戦力になりますし、私は索敵や結界術が使えますので、蓮さまのお力になりますよ」

「それならさ、その『さま』って……やめない？」

ふたりは目を見合わせて唇を閉ざした。

怒ってはいないだろうが、もしかしたら呆れているのかもしれない。

蓮は慌てて言った。

「多分、俺の方がふたりより年下だしさ、いつまでも仰々しいの好きじゃないし……」

礼儀に厳しそうな武田が「ですが」と口を開いた。
「蓮さまは言わば客人のようなものですし、安倍晴明さまが遣わした使者であり、」
「聖乳さまですし……ブフォッ」
浅井がふざけると、武田は一瞬遠い目をしたが、すぐに自力で気持ちを立て直した。
「とにかく、敬意を払うのは当然のことですので、できればこのままの呼び方がいいのです」
お堅くて忠犬っぽい武田を説き伏せるのは難しそうだ。
浅井は押せば変えてくれそうだが、きっと武田が許さないだろう。
蓮はひとまず、諦めようとした。だが、一連のやり取りを見守っていたお節介な兄が軽い調子で口を挟んできた。

「いいじゃないかそれぐらい。蓮くん本人がそうしてほしいって言ってるんだから」
「景臣さま……しかし……」
「蓮の希望には応えてやれ。しかし、呼び捨ては許さん」
「隊長……」
まさに鶴のひと声。思わぬ援軍に、武田も押されている。
「……で、では、蓮さんとお呼びしてもよろしいでしょうか……」
「じゃあ私も」
ぎこちない武田と、軽く手を挙げて乗ってきた浅井。対照的なふたりだが、これはこれで悪くないコンビに見える。
「うん！　改めてよろしくな。武田さん、浅井さん！」
そこへ朔臣が一歩前へ出る。

「総監命令により、本日より俺たち五名を中核とした特別討伐部隊を編成する」

「え、景臣さんも一緒に戦ってくれるの？」

「うん、そうだよ。先日の西部での戦闘で事態は大きく動いた。速やかに沈静化するには、戦力が揃ってないとね」

つまり、それだけ油断を許さない状況ということだ。

「悪霊は帝国全土で確認されている。これまでのような局単位では対応できない。俺たちは各地を巡り、神格級悪霊の討伐を最優先任務とする」

『神格級』という言葉が重くのしかかる。

嫌でも先般の西部での戦闘を思い出す。血だらけになって倒れる隊員たちの姿。その中に、自分と親しいこの人たちがいる。

痛ましい沈黙が落ちる。

その空気を見計らっていたかのように、会議室の扉が静かに叩かれた。
「失礼いたします」
部屋の外から侍従が現れ、深々と一礼する。
「朝比奈蓮様。総監閣下より、お召し物をお預かりしております」
「……俺？」
侍従の後ろでは、数人の従者が大切そうに大きな桐箱を運び込んでいた。
「特殊母乳除霊師『聖乳』さま専用装束でございます」
「専用装束？」
目を丸くして聞き返す。その後ろで、浅井が頬の肉を噛んで笑いを堪えていた。
「どうぞ、ご覧ください」
侍従は静かに桐箱の蓋へ手を掛けた。

皆が注目する中、ゆっくりと蓋が開かれた。

「わ……」

思わず声が漏れた。

そこに納められていたのは、これまで身につけていた白いシャツとはまるで異なる、神々しい法衣だった。

雪のように白い装束は、滑らかな絹で織られ、光を受けるたび真珠のような艶を帯びる。

「すげ……ひらひら……」

袖はゆったりと広く、動くたびに羽衣のように揺れた。

胸元には、一輪の蓮華が銀糸で精緻に刺繍されている。

一見ただの刺繍にしか見えない。しかし近づいて見ると、一枚一枚の花弁には細かな霊符が織り込まれ、淡く神気を宿していた。

「これ……俺が着るの？」
「ええ。特殊母乳除霊師『聖乳』さまのためだけに仕立てられた神乳装束でございます」
「神乳装束？」
ふざけているのかと思ったが、侍従は恭しく一礼する。
「この法衣に織り込まれている蓮華紋は神具です。術式を発動すると蓮華紋が開花し、神乳を霊力へ昇華いたします。法衣を脱ぐ必要はございません」
「へぇ、そんなことできるのか」
確かに、術を発動するたびにいちいちシャツを脱がなくて済むのはありがたい。
蓮は恐る恐る衣装を持ち上げる。重さはほとんど感じない。
それどころか、触れたところから霊力が全身を優しく巡るような心地よさ

があった。
「着るのは大変そうだけど、すごく便利なんだよな？　えっと、九条……さま？　にお礼を伝えてください」
「かしこまりました」
侍従はまた深くお辞儀をすると、静かに去っていった。
蓮は腕の中の法衣を見下ろす。
「……受け取ったはいいけど、これどうやって着るの？」
「せっかくだから、合わせてみたら？」
景臣が穏やかに促すと、浅井も笑みを浮かべた。
「着替えなら私が手伝いますよ。さ、蓮さん、腕を上げて」
「はい」
とりあえず服の上から羽織ってみる。

「おお……なんか、身体が軽いかも」
純白の法衣は蓮の身体にぴたりと馴染み、広い袖は動くたびに優雅に揺れる。
銀糸で織られた蓮華紋は胸元で淡く灯り、裾に走る蒼の文様はその光を受けてきらめいた。
装束全体が、ひとつの蓮華のようだった。
「なんかこれ、晴明の服みたいだな」
胸元の蓮華紋が白い光を強める。
朔臣は蓮から一瞬たりとも目を離さず、満足気に頷いた。
「これだけ光っていたらはぐれても安心だな」
真面目な顔をして何を言い出すかと思えば……と、景臣ががっくりと肩を落とす。

「蓮くん、不甲斐ない弟でごめんね。朔臣、こういう時は、恋人を褒めるものだよ」
「兄貴ヅラするな。褒めている」
「全く褒めてないでしょうが。街の街灯じゃないんだから、まったく……」
和やかな笑い声が広がる。
その空気を切り裂くように、会議室の扉が勢いよく開かれた。
「失礼します！」
飛び込んできた隊員は肩で息をしながら、朔臣の前で膝をつく。
「報告いたします！　東部鎮霊局管轄・桐ヶ谷（きりがや）村にて大規模な霊障が発生！　現地討伐隊が交戦中ですが、戦況は極めて劣勢です！」
隊員は悔しそうに唇を噛み、部屋の空気が一変した。
景臣は腕を組み、小さく息を吐いた。

「……思ったより出番は早かったね」
「周辺住民は避難中ですが、悪霊が瘴気を撒き散らし、一般隊員では近づくことも困難です！　現地では既に多数の負傷者が出ており、東部鎮霊局より緊急応援要請が届いております！」
朔臣は隊員を見据えた。
「東部隊長は」
「現在、単独で神格級悪霊の足止めを行っております！」
その場の空気が張り詰める。
景臣が皆の心情を代弁するかのように言った。
「隊長が単独で？　……一刻の猶予もないということだね」
蓮は胸元で淡く輝く蓮華紋へ一度だけ目を落とし、力強く頷く。
「みんな、行こう！」

五人は会議室を飛び出し、本部地下深くに設けられた転移殿へ向かう。
「転移術なら僕に任せて」
景臣が髪をかき上げ、普段は秘している左目を露わにする。
巨大な石畳には幾重もの術式が刻まれ、中央には五芒星を囲むように複雑な紋様が淡く輝いていた。
「全員、術式内へ」
「あー……、私これ、苦手なんですよねぇ。お腹がウッとなるから……」
「浅井さん、目を瞑っていたらすぐ終わりますから」
「はーいはい」
ぶつぶつと嘆く浅井、そして宥める武田とともに、円陣の中へ足を踏み入れる。
景臣が印を結び、空を切った。

「転移座標、東部鎮霊局管轄・桐ヶ谷村」
術式が眩く輝き、床一面に描かれた文字が浮かび上がる。
「俺に捕まっていろ」
「う、うん」
朔臣の腕にしがみつくと、空間そのものが水面のように揺らいだ。
揺らぎが頂点に達した瞬間、五人の姿は白い光に包まれた。
「うわっ」
景色が歪み、身体がふわりと浮く。
一瞬の浮遊感。周囲が急速に変化していった。
「蓮、もう目を開けていいぞ」
「お、おう……」
目を開くと、そこは帝都ではない。

切り立った山々に囲まれた東部鎮霊局。空は瘴気に覆われ、遠くの山腹からは黒い霊柱が天を貫いていた。

「遅かったか……」

地鳴りと共に凄まじい霊圧が押し寄せる。

東部の隊員が血相を変えて駆け寄った。

「帝都隊長殿！　応援ありがとうございます！　現在、神崎隊長が単独で悪霊を食い止めています！」

「案内を頼む」

「はっ！」

東部隊員の先導で、一行は瘴気の渦巻く山道を駆ける。

木々は黒く枯れ果て、大地には巨大な爪痕が幾筋も刻まれていた。

「酷い……」

蓮はあまりの惨状に表情が強張る。
戦闘の跡だけではない。あちこちに破られた結界札が散乱し、折れた刀が墓標のように地面へ突き刺さっていた。
「ここまで押し込まれたのか……」
武田が険しい表情で呟き、拳を叩いて炎を纏わせる。
臨戦態勢を取った武田の一歩後ろで、浅井が印を切って結界を張り直す。
――ドォンッ!!
山全体を揺るがす轟音。続いて、巨大な霊力の奔流が森を吹き抜ける。
「あちらです！」
木々を抜けた先。崩れた神社の境内で、ひとりの男が巨大な悪霊と対峙していた。
「はぁ……しんど」

紫がかった黒髪の男は、どこか退屈そうに呟く。
キツネのような切れ長の瞳には焦りの色がない。
「もう帰りたいねん。いい加減死んどけって！」
『ガああアッ!!』
黒漆の鉄扇が悪霊を切り裂いた。
悪霊が咆哮を上げながら巨大な腕が振り下ろしたが、その男は半歩だけ身体をずらした。
紙一重。髪一本触れさせない。
「遅いんじゃボケェ」
双扇を静かに開く。
扇面に描かれた紋様が一斉に光を放った。
「――『縛』」

無数の光の鎖が空中へ走り、悪霊の四肢へ絡みついた。

『グルるるるルルッ』

「……お前ホンマつまらんなぁ。せっかく神様言うて村民が崇めてやってたのに……恩知らずが」

『何ガ信仰だ！　都合の良イ時ダケ我ヲ利用し、不要となれバ塵のヨウに打ち捨てタ!!　許さン、許さンンンッ！！！』

悪霊は瘴気を爆発させ、拘束を力任せに引き千切った。

「……チッ」

男の眉が僅かに動く。

「神崎隊長!!」

東部隊員が叫ぶ。

「あ～？」

男――東部鎮霊局隊長・神崎蒼士（かんざきそうし）は、ようやくこちらへ視線を向けた。
「応援か。いらん言うたやろ。しかも榊原兄弟やんけ。チッ、帰れや」
その声音には歓迎も感謝もない。
呆気に取られる一行の目の前で、神崎は肩を竦め、鉄扇をくるりと指先で回した。
「俺はお前ら兄弟が嫌いなんや」
「てめぇ……！」
「神崎」
あんまりな言い草に蓮はキレそうになったが、景臣が穏やかに声を掛ける。
「これは総監命令だ。今回は合同任務になる」
「総監命令ぃ？」
神崎は露骨に顔をしかめた。

「また面倒押しつけよって……」
そうぼやきながらも、命令を無視する気はないらしい。
「あん？」
神崎の視線が、朔臣の隣に立つ蓮で止まる。
「……そいつが噂の」
頭から足先まで値踏みするように眺め、馬鹿にするように鼻で笑った。
「聖乳様か。こっちまで噂流れとるで。どこから来たかもわからんが、ツラと身体で帝都の隊長を籠絡したってな」
「ンだとてめぇ!!」
蓮が怒鳴りつけた瞬間、大地が震えた。
『ガアアアアッ！！！』
拘束を完全に引き千切った悪霊が、瘴気を纏った巨腕を振り上げ、一行へ

襲い掛かった。
「散れ！」
朔臣の号令と同時に全員が左右へ飛ぶ。
悪霊の拳が地面を砕き、境内一帯が土煙に包まれた。
「武田！」
「はっ！」
武田が炎を纏った拳で悪霊の腕へ飛び込み、渾身の一撃を叩き込む。
「どぉらッ!!」
爆炎が弾け、悪霊の身体が僅かによろめく。
「浅井！」
「了解です」
浅井が霊符を放つ。札は四方へ飛び、瞬く間に巨大な結界陣を展開した。

「逃がしませんよ！」
青白い結界が悪霊を包み込み、瘴気の拡散を抑え込む。
「ほぉ」
神崎は感心したように鼻を鳴らした。
「帝都もそれなりやるやん」
皮肉を零しながらも、神崎の意識は既に悪霊だけへ向いていた。
乾いた音を立てて漆黒の扇を閉じる。
「いくでぇ」
神崎は地を蹴った。
「速い……！」
蓮の目が追いつく頃には、既に悪霊の肩へ立っていた。
双扇を優雅に翻し、不敵に笑う。

「――爛漫・花嵐」

ぶわり、と無数の霊力の花弁が舞った。

花弁に触れた瞬間、悪霊の身体が次々と切断されていく。

『ギャアアああアッ！』

断面から黒い瘴気が噴き出した。

「まだや」

神崎は空中で身体を捻り、鉄扇を横一文字に振り抜く。

目に見えない斬撃が悪霊の全身を縦横無尽に駆け抜ける。

巨大な身体へ傷が刻まれた。

「アイツ……ムカつくけどめちゃくちゃ強ぇ……」

圧倒的な力に蓮が呆然と呟く。

神崎は扇に付着した悪霊の体液を払いながら吐き捨てた。

「これで祓えるんなら、とっくに終わっとる」

悪霊の身体が黒く脈打つ。

裂けた傷口という傷口から瘴気が逆流し、切断された腕が瞬く間に再生していく。

『我ハ……山の神……』

地面が軋む。

『信仰あル限リ……滅ビヌ』

境内のあちこちに転がっていた古い祠や注連縄が黒い霊力を放ち始める。

「しまった！」

景臣の顔色が変わる。

「あの悪霊、この山そのものを依代にしている！」

「見たらわかるやろが!!　あのクソダボ、何回斬っても再生しやがる。おい、

ポンコツ弟ォ！　ボサっと突っ立っとらんと足止めぐらいせぇや！」
「俺に命令するな」
朔臣の目はすでに赤く色を変えている。彼は静かに刀へ手を掛けた。
「――掛けまくも畏き天津神」
きぃん、と空気が冷える。朔臣の足元から霜が広がり、視界が白く染まった。
「禍いを断ち、穢れを祓いたまえ」
山を覆っていた瘴気までもが、何かを恐れるように揺らいでいる。
悪霊が天を震わせるほどの咆哮を上げた。
『オオオオオオオオオオオッ！』
轟音とともに大地が波打つ。境内を埋め尽くす黒い瘴気が、津波のように四方へ流れ出した。

ぼこり。
地面が盛り上がる。
ぼこり。
ぼこり。
土の中から、人の腕が次々現れた。
黒く腐敗した指先が土を掻き、這い上がる。
「……来ます！」
浅井が叫ぶ。
無数の亡者が姿を現した。
鎧武者。
僧兵。
巫女。

山伏。
獣の頭を持つ異形。
首だけで転がる女。
四足で這い回る赤子の悪霊。
瘴気を纏った獣。
山中という山中から悪霊が湧き出してくる。
木々の枝という枝にぶら下がり、崖を這い、岩陰から覗き込み、まるで山そのものが生き物になったようだった。
蓮の背筋を冷たい汗が伝う。
「うそだろ……」
逃げ場がない。
『殺セ』

『殺セ』
『生キタ人間ダ』
悪霊の声が重なり、山全体が唸り始めた。
最初に動いたのは景臣だった。
「これ以上悪霊が発生しないよう、霊脈を封じる！」
巨大な五芒星が空へ浮かび上がった。
「――封界！！！」
山肌を覆っていた瘴気が一斉に押し返される。
浅井が札を手に霊力を放つ。
「私も手伝います！」
霊符が数十枚、一斉に舞う。
空中で幾何学模様を描きながら広がり、三重の結界が悪霊を中心に展開さ

れた。
「雑魚は俺にお任せください！」
武田が炎を纏って飛び出す。拳が振るわれるたび爆炎が咲き、数体の悪霊がまとめて吹き飛んだ。
「蓮、俺から離れるなよ」
「うん」
朔臣が刀を振るうと、銀白色の霊力が細い糸のように溢れ始めた。
朔臣の霊力は吹雪となって山を包み込んだ。
『ギャッ!?』
『グギュッ！』
一片一片の雪に霊力が宿り、悪霊は呆気なく霧散していく。
果てのない白銀の世界。

その中心に立つ朔臣だけは、凍てつくような殺気を纏っている。
刀が鞘から滑り出した瞬間、甲高い鈴のような音が山中へ響き渡った。
「吹き荒れろ、氷獄」
朔臣を中心に純白の霊力が柱となって天へ突き抜ける。
吹雪は暴風へ変わった。木々は根こそぎ揺れ、空を覆う瘴気雲までも裂けていく。
「なっ……んだよ、これ」
蓮は目を見開く。朔臣の周囲だけ重力すら変わって見えた。
「蓮、伏せろ」
そのひと言と共に、朔臣は刀を振り下ろす。
巨大な白銀の斬撃が視界を縦に割った。何体もいた亡者たちが、一瞬で光へ変わって消えていく。

『グォオオオオオオッ！』

山そのものが悲鳴を上げる。

地面が大きく裂け、巨大な亀裂が尾根まで走った。

「いや怖いってぇ！　森林破壊だろこれぇ!!」

蓮の叫び声は轟音に掻き消された。

一行が「やりすぎなんじゃ……」と絶句する中、ただひとり、神崎だけが不敵に笑っていた。

「ハッ！」

口元を吊り上げる。

「やるやないか、ポンコツ弟ォ！」

勢いよく開かれた扇が桜色の霊炎に包まれていく。

「ほな、俺も本気や」

神崎の髪がふわりと浮いた。
山中の風という風が、神崎ひとりへ吸い込まれていく。
木々がざわめき、雲が渦を巻く。
花びらが逆巻いた。
「――百花繚乱・乱舞！」
霊力の花弁が吹き荒れる。季節を無視した花々が暴風となり、山全体を飲み込んだ。
まるで桃源郷に迷い込んだかのような美しい術に誰もが目を奪われる。
だが、この男だけは凶悪に嗤う。
「ぐちゃみそにすり潰したるからなぁ」
花弁が、すべて刃へ変わった。
無数の刃が悪霊へ襲い掛かる。

花弁が触れるたび、悪霊が薄紙を裂くように切り刻まれていく。
肉体が幾千もの断片へと分かれ、黒い瘴気が噴き上がった。
「まだ終わらへんでぇ！」
神崎が双扇を大きく薙ぐ。
渦巻いていた花吹雪が一斉に悪霊の中心へ収束した。
「咲き狂え、俺の桜姫」
山を揺るがす大爆発とともに、花弁の竜巻が天まで突き抜ける。
『ギャッあ、ぁぁ、あアアッ!?』
数え切れない斬撃が重なり合い、悪霊の巨体は原形すら残さず粉々に砕け散った。
爆風が山林を薙ぎ払う。折れた巨木が宙を舞い、岩盤が崩れ、境内そのものが消し飛んだ。

「エグすぎんだろ……」

蓮は思わず呟く。これほどの力が存在するのか。

人が放った術とは到底思えなかった。

神崎は鉄扇を閉じ、ふんと鼻を鳴らす。

白い頬には、冷や汗が滲んでいた。

「……俺の最終奥義やで？」

静寂は一瞬だった。砕け散った黒い瘴気が、まるで意思を持つ生き物のように地面を這う。

山肌。

祠。

木々。

岩。

あらゆる場所から黒い霊力が吸い寄せられ、空中へ集まり始めた。
粉々になったはずの肉片が黒い泥のように蠢き、互いを求め合うように集結していく。
ぐちゃり。ぐちゃり。
耳障りな音を立てながら肉塊は膨れ上がり、骨が組み上がり、筋肉が繋がり、皮膚が再び形を成した。
『我ハ……滅び、ヌ……まだ……怨ミが……尽きヌ……』
悪霊は、何事もなかったかのように立っていた。
傷ひとつない姿で。
「は？」
「あり得ない……」
武田が目を見開き、浅井も唇を噛む。

「クソが……」
神崎は舌打ちしながら、忌々しそうに悪霊を睨みつけた。
朔臣も静かに刀を下ろす。
「……ここまでとはな」
「なんとか此処で祓わないと……西部の二の舞いになる」
景臣は鋭い目で悪霊を見上げた。
『信仰は……我ノ命……』
山中の祠が次々と脈動する。黒い光が地中を駆け巡り、霊脈を通じて悪霊へ流れ込んでいく。
霊圧が一気に跳ね上がり、景臣が結界へ霊力を流しながら叫んだ。
「まずい！　霊力がさらに増している！」
悪霊の身体は先ほどよりも一回り巨大になり、山全体が悲鳴を上げるよう

に震え始める。
悪霊の濁った瞳がゆっくりと蓮を捉えた。
『……見つ、ケタ』
巨大な眼球が細まり、獣が獲物を見定めるように蓮だけを映していた。
『……お前、ガ、コノ世界に現れタ、時……我々なりソコ無いは色めきたっタ……』
瘴気が渦を巻く。
『その身ヲ喰エバ……我ハ……完全なる神トナル』
「蓮ッ！」
景臣の叫びと同時に、悪霊の姿が掻き消えた。
「え――」
さっきまで蓮が立っていた場所が爆発したように抉れ、巨大な腕が地面を

砕く。
「ぐっ！」
朔臣が蓮の身体を抱き寄せ、紙一重で飛び退く。
砕けた岩が雨のように降り注ぎ、土煙が山一帯を覆った。
「最初から蓮が狙いか……！」
朔臣が忌々しげに吐き捨てる。
浅井は青ざめながら霊符を放った。
「完全に蓮さんを獲物と認識しています」
悪霊は朔臣へ視線すら向けない。呆然とする蓮だけを見つめ、歓喜に震えていた。
「させるか」
朔臣は蓮を背中へ庇うように立つと、刀をゆっくり構えた。赤い瞳が悪霊

を射抜く。
「蓮には指一本触れさせん」
冷気が一気に爆発する。朔臣の殺気だけで山中の木々が凍り付き、空気そのものが軋んだ。
『喰ウ……喰ウゥゥッ!!』
大地を砕きながら、巨体が一直線に蓮へ迫る。
武田が爆炎を纏って跳び上がった。
「おぉらッ！」
拳が悪霊の顎を捉えた。炎柱が噴き上がり、巨体がわずかに仰け反る。
「「――展開!!」」
浅井と景臣から放たれた幾重もの結界が悪霊を囲み、瘴気の流れを押し留めた。霊脈へ術式が打ち込まれ、山を巡る黒い光が鈍く揺らぐ。

「じゃかぁしいんじゃカス!!」
風より速く悪霊の元へ降り立つと、鉄扇を滑らせた。
「花嵐！」
神崎がいくらダメージを与えても、黒い肉が失った部位を繋ぎ合わせていく。
「再生が早すぎる！」
景臣が叫ぶ。
「俺が凍らせる！」
朔臣が刀を構え、白銀の霊力が噴き上がる。
氷が山を覆い、悪霊の足元から凍り付いていく。
『オオヲヲオッ!!』
暴れようとした腕が氷に閉じ込められた。

朔臣は一歩踏み込み、刀が閃く。
銀白の斬撃が悪霊を斜めに切り裂いた。
凍った肉体が砕け散り、氷片とともに宙へ舞う。
武田が炎を叩き込み、神崎が花吹雪で肉片を細切れにする。
浅井は結界をさらに重ね、景臣は霊脈を封じ続けた。
「蓮、今だ――――！」
「おう!!」
ほんの一瞬。呼吸と呼吸の合間のような刹那、悪霊の霊力が乱れた。
その隙を、朔臣は見逃さなかった。
「……ぼっ、ぼにゅ……いや、霊力解放!!」
胸元の蓮華紋が眩く開花する。
純白の法衣が神々しい光を放ち、全身を巡る霊力が胸へ集まっていく。

淡い光が胸元へ集中し、神気が一気に高まった。
「いっけぇッ！　母乳スプラッシュ！！！」
胸元から放たれた純白の奔流が一直線に悪霊へ突き刺さる。
神乳は光の柱となって悪霊を飲み込み、触れた瘴気を次々と浄化していく。
『ガァァァァァァァッ!?』
絶叫が山へ響く。
黒かった肉体は白い光に包まれ、崩れながら霧へと変わっていく。
「おらぁ――ッ！！！」
光の柱が一段と膨れ上がり、悪霊の胸に刻まれていた黒い紋様へ亀裂が走る。
『バ、バカな……我ハ……神……』
「神じゃない」

蓮はまっすぐ悪霊を見据えた。
「お前は神さまなんかじゃない」
蓮華紋が最後の輝きを放った。
純白の光が悪霊を完全に包み込み、その巨体は無数の光粒となって夜空へ溶けていった。
「終わっ、た……？」
山を覆っていた瘴気も音もなく晴れ渡り、張り詰めていた空気がゆっくりとほどけていく。
はぁ～っと複数のため息が背後から聞こえた。
「やっと倒せましたね……」と武田。
「もう霊力空っぽですよ」と浅井。
「僕も流石に疲れたぁ……」と景臣。

三人はへなへなと座り込んでいる。
「蓮！」
「朔臣ぃ……俺、やった？　よな？」
「ああ、見事だった」
駆け寄ってきた朔臣に抱きつくと、背中を優しくさすられた。
強く抱きしめられ、じわじわと安堵感が広がっていく。
「……アレは、大丈夫か？」
「ん」
耳元で朔臣が囁いた。『アレ』とは、蓮が霊力を解放した後に訪れる発情のことだ。
大技を使った後なのに、蓮の身体に異常はない。
風邪を引いたかのような怠さがあるだけだ。

「朔臣、腹減った」
「俺もだ。霊力を使った後は腹が減る」
「何か食いたい」
「そうだな。さっさと帝都に戻って飯にしよう」
「待たんかい。なんで帝都やねん」
和やかなふたりの会話に、神崎が割って入った。
朔臣は盛大に顔を顰める。
「何故だと？　ふん、決まっている。東部に美味い飯はない。飯全てに旨みがなく、味が濃いから口に合わない」
「お前が馬鹿舌なだけやろが」
「俺の舌は馬鹿じゃない」
まるで子どもの喧嘩だ。

ぎゃあぎゃあと言い争うこのふたりは、本当に仲が悪いようだ。
「ほいで……アンタ、名前なんて言うん？」
「……朝比奈蓮だけど」
「ふぅん。なぁ、蓮」
「おい、蓮を呼び捨てにするなキツネ野郎」
「だれがキツネや」
神崎は鬱陶しそうに肩をすくめると、ゆっくり蓮へ歩み寄った。
朔臣が一歩前へ出ようとするが、蓮は「大丈夫」と小さく首を振る。
神崎は蓮の目の前まで来ると、じっと顔を覗き込んだ。
「……」
「な、何？」
切れ長の瞳は感情が読めない。珍しい骨董品でも鑑定するように、頭の先

から爪先まで観察している。
「待って近い、近いんだけど……」
「顔と身体でのし上がっただけやなさそうやな。せやけど――」
神崎の笑みが、すっと消えた。
「俺は、悪霊いうもんを山ほど祓ってきた」
静かな声だった。
「その中でいろんな奴と会うてきたけど、あんな霊力は初めて見た。なんや、美味そうやな」
神崎は蓮の胸元――蓮華紋へ目を落とす。
法衣の紋様は、戦いを終えた今も微かに光を宿していた。
「えっ？」
ぐいっ、と胸元が掴まれた。

「味見させろや」
「!?」
低く囁いた、その直後だった。
神崎は迷いなく蓮の唇を塞いだ。
「――っん!?」
突然のことに、蓮の思考が真っ白になる。
「ん、んん――ッ！　ん――ッ!!」
離れようとしても、後頭部へ回された手がそれを許さない。
強引に重ねられた唇は、挑発するように数秒間そのまま押し付けられた。
「っ……！」
驚いたように、神崎が唇を離した。
口の端を切ったらしく、血を親指で拭う。それでも笑っていた。

「……ハハ。噛みつかれてもうた」
「こいつ……舌まで絡めやがった！」
蓮は怒りに任せて拳を振り上げた。だが、拳が到達するよりも早く、神崎の身体は吹っ飛んだ。
「神崎ィ！！！」
朔臣の拳が容赦なく神崎の頬へ叩き込まれ、そのまま数メートル先まで転がる。
「貴様ァ……!!」
地面を踏み砕くほどの殺気。
朔臣の赤い瞳は完全に怒りに染まっていた。
「殺す……！！！」
朔臣の霊圧が爆発する。

吹雪が巻き起こり、周囲の木々が一瞬で凍りついた。
刀が抜かれる寸前、景臣が慌ててふたりの間へ割って入る。
「待って待って！　本当に山がなくなるから！」
「どけクソ兄貴」
「どけないよ!!　大体、神崎もやりすぎ！　ふざけるのも大概にしなさい」
「ふざけてへん」
武田も浅井も青ざめて背中に縋りつく。
「隊長、落ち着いてください！　これ以上被害が出ては、本部から何を言われるかわかりません!!」
「離せ武田!!　今日という今日はコイツを殺す！！！」
「ダメですって！　ああもう！　神崎隊長も何やってるんですか！」
神崎は朔臣の罵倒など意に介さず、にやにやと軽薄に笑っている。

「アンタ、気ぃ強くていいなぁ。しかも顔もまあまあ悪くない。俺はなぁ、他人のモン奪るのが一番興奮すんねん」
「最低だな、お前。俺に寝取られの趣味はねぇよ」
ぺろりと舌舐めずりする神崎に、危うい執着が見え隠れする。
「その相手が榊原弟やなんて、最ッ高やろ」
神崎の瞳には、獲物を見つけた獣のような愉悦だけが宿っていた。
――新たな火種は、悪霊ではなく、人の中に生まれようとしていた。

# 第十三話　置きざりの春。

討伐を終えた一行は、東部鎮霊局本部へ帰還した。
傷ついた隊員たちは医務室へ運ばれ、武田や浅井も治療を受けるため席を外し、朔臣は本部への事情聴取に呼ばれている。
通された客室には蓮と景臣、ふたりが向かい合ってお茶をしている。
朔臣の事情聴取が終わったら景臣が呼ばれるのだが、被害が甚大だったため、時間がかかるそうだ。
蓮は法衣からラフなシャツとスラックスに着替え、景臣も隊服の上着を脱いで寛いでいる。

東部の隊員が淹れてくれたほうじ茶を同時に啜り、息を吐いた。
「……あの悪霊……すっげぇ強かったですね」
「だねぇ。あんな神格級の悪霊なんて滅多に発生しないんだけど……はぁ、疲れた……」
景臣は不足した糖分を補うために、さっきから饅頭を口いっぱいに頬張っている。
銀髪の麗人がもぐもぐとお菓子を貪る様は、ギャップがあって面白い。
「人によるんだけど、僕の場合は甘い物が欲しくなるんだよねぇ。朔臣はおにぎりをよく食べているし、神崎はしょっぱいものが欲しくなるって言ってたなぁ」
「神崎……」
双扇を振るい、絢爛な術を使う東部鎮霊局隊長・神崎蒼士。

本心を悟らせない切れ長の瞳が印象的な青年の姿が脳裏に浮かぶ。
「……大丈夫かい？　その……すまなかったね。神崎があんな真似をして」
「景臣さんが謝ることじゃないです」
蓮が咄嗟に首を振ると、景臣は何か言いたげな顔をしたが、それもすぐに直った。
「以前はあんな子じゃなかったんだけどね」
「知り合いだったんですか？」
「うん、神崎は元々、西部鎮霊局（ウチ）の隊員だったからね」
それならずっと不思議だったことにも納得がいった。
「それで関西弁なんだ」
「あ、そうそう。出身は西だよ。だから西部にいたんだ。朔臣も帝都の隊長になるまではウチにいたんだけど……その時からふたりは仲が悪くてね……

はぁ……」

景臣は遠い目をして深いため息を吐いた。

いがみ合うふたりの間に入っていたのだろう。苦労は推して知るべし、だ。

「じゃあ、なんで東部に？」

景臣は困ったように笑う。

「隊律違反を犯したんだ。禁書を持ち出してね。神格級の悪霊を召喚してしまった」

「神格級ってことは……」

蓮の顔が強張る。

「そう。今日戦った悪霊と同じ規模の……しかも、厄介な術を使う悪霊だった。当然西部の被害も甚大で、僕たち兄弟で討伐にあたったんだけど……今生きてるのが不思議ぐらい、危ない敵だった」

「そんな……どうして」

「詳しいことは何も言わないんだ。腕試しのつもりだったのか……。本人は大怪我を負っているし、東部へ異動になった時も、あっさり西部（ウチ）を出て行ってしまった」

寂しそうに笑う景臣の目には、神崎が西部鎮霊局を出て行った時の光景が映っているのだろう。

「神崎のこと、可愛がってたんだね」

「うん、すごく才能のある子だったんだけど、いつもひとりぼっちでね。構うと鬱陶しそうにされたよ。けれど、それがすごく可愛かったんだ」

なんだか目に浮かぶようだな、と蓮は目を細めて微笑む景臣をそっと見つめる。

懐かしむような、愛おしむような目。こんな顔で景臣に見つめられたら、

何でも言うことを聞いてしまいそうだ。
「ふうん。でも、なんか引っかかるね」
神崎はふざけた性格ではあるが、隊律違反をするような人間には見えなかった。景臣も小さく頷いて同意する。
「何度も事情を聞いたんだ。東部へ異動が決まった時も猛反対したんだけど、神崎本人があっさり了承してしまった……もしかしたら、僕から離れたかったのかもね」
何でもないように言う景臣が、余計に痛々しく見える。
「あの一件で、もともと上手くいってなかった朔くんとは決定的に仲が悪くなってしまった」
「景臣さん……」
蓮が眉を下げると、景臣はハッとして取り繕うように言った。

「なんてね！　これはもう終わったことだから、僕ひとりがうじうじしても仕方ないよね。神崎も東部で隊長にまで昇りつめたし……あのままウチにいるより、結果的には良かったんだよ」

景臣の勢いはどんどん弱くなって、

「うん、良かった……」

最終的に、しゅん、としょぼくれてしまった。

なんて声を掛けたらいいのかわからなくて居た堪れない。

客室を静寂が満たす。蓮は何か声を掛けようと唇を開きかける。

しかし、どんな慰めも薄っぺらく思えて、結局何も言えなかった。

ガラリ、と襖が開く。

「蓮」

低く、よく通る声だった。

「神崎……、さん」
入口には神崎が立っていた。
思わず呼び捨てにすると、じろりと睨まれた。
(自分は呼び捨てにしたくせに……)
神崎は鴨居へ片手を添えたまま、つまらなさそうに鼻を鳴らした。
「神崎、急に入ってきて何だい？」
景臣が嗜めても、神崎は目もくれない。
「来い」
「え、俺？」
「おん」
蓮は戸惑って景臣を見た。景臣も理由がわからないらしく、小さく首を傾げている。

「蓮くんに何の用？」
景臣にしては厳しい声色で言うと、神崎はようやく視線を向けた。
「討ち漏らしや。さっきの戦闘で触発された悪霊が結界の外に湧いて出た」
「それなら僕が出る」
「霊力空っぽのアンタが来て何になんねん。コイツの方がまだマシや」
最後に技を放っただけの蓮とは違い、景臣は戦闘の最初から最後まで大規模な結界術を使っていた。
いくら景臣が人並外れた霊力の持ち主だとしても、山ひとつを覆う結界だ。霊力が尽きるのは当然のことだろう。
「蓮くんはまだ戦闘に慣れていない。彼の術は確かに強力だけど、僕たちのサポート無しに討伐は認められない」
「此処を何処やと思っとんねん。東部鎮霊局や。そのトップの俺がついとる。

五体満足で帰したるから安心せぇ」
「駄目だ」
景臣は頑として譲らない。
「悪霊の狙いは蓮くんだ。危険な目に遭わせられない」
「だからやダボ。コイツがおらな悪霊が寄ってこんやろ」
「蓮くんを囮に使うつもりか！」
「そうや。囮や。ここで祓わんと、悪霊は何処に向かう？　エサを求めて人里に下りる。そんなこと、アンタやったらすぐわかるやろ」
「……なら、僕も行く」
それが最低条件だ。と景臣は神崎を鋭く睨みつけた。
しばらく睨み合いが続いたが、
「チッ」

折れたのは神崎だった。
「さっさと来い」
「あ、ちょっと！」
「蓮くん、ごめんね。急ごう」
「は、はい！」
蓮は立ち上がると、神乳装束へ視線を向けた。
「法衣を……」
「そんなモンいらん！　はよせえ！」
「え、ちょっ……！」
神乳装束がないと、術を使う時の恩恵が受けられない。
法衣に着替えようとした蓮は腕を取られ、引き摺られるようにして客室を出た。その後を景臣も慌てて追う。

すれ違う隊員たちがぎょっとして道を開ける中、神崎は一度も足を止めない。

「北側や。急ぐで」

局の門を抜けると、ひんやりとした山風が三人の頬を撫でた。

神崎が先頭を切って駆け出し、蓮と景臣もその背中を追った。

※※※

山道を駆け上がるにつれ、空気が重く淀んでいく。

「……っう」

「蓮くん？」

「なんでも、ないです……」

法衣を纏っていた時には収まっていた副作用。悪霊の接近を感知して母乳が溢れた。

出来ればもう感じたくなかった痛みだ。

「やはり……」

「景臣さん、大丈夫です！　これぐらいもう慣れたから」

まだ何か言いたそうな景臣に背を向け、急勾配を先に進んでいく神崎の後を追う。

「うわ、なんだこれ……」

木々の葉は風もないのにざわめき、枝先から黒い靄が糸のように垂れ下がっていた。

神崎が足を止める。

「おるな」

低く呟いた声が森へ溶ける。

「え？」

蓮も息を整えながら前方へ目を凝らした。

暗い林の奥。闇がゆっくりと蠢く。

靄は地面を這い、やがて一本の木を包み込むように渦を巻いた。

枝が軋み、幹が裂ける。
「うっ……！」
樹皮の隙間から覗いたのは、人の顔だった。
幾つも、幾つも。
泣き叫ぶ顔。
笑う顔。
怒り狂う顔。
無数の表情が幹一面に浮かび、苦しげな呻き声を重ねている。
やがて木全体が持ち上がるように揺れ、巨大な腕が二本、生えた。
『ァァぁぁァァ……』
森中へ響く濁った怨嗟の声に、ぞっと鳥肌が立つ。
景臣が目を細めて言った。

「樹霊型……神格級ほどじゃないけど、かなり育ってるね」
神崎は扇を開き、淡々と言った。
「腰抜けはそこで震えとけや」
「なんっ……」
あんまりな言い草に言い返そうと口を開くと、悪霊の顔が一斉にこちらを向いた。
「ひっ」
ぞわり、と背筋を冷たいものが這う。
次の刹那、巨大な腕が地面を抉りながら振り下ろされた。
『……来イ……！　神乳ゥウウ!!』
――避けられない！　そう悟った刹那、銀色の影が目の前へ滑り込んだ。
「――展開！」

淡い光が円を描く。

朔臣とよく似た背中だ。美しい銀髪が煌めいている。

「景臣さん!!」

「霊力が保たない……！　早く逃げて!!」

景臣の結界は形を成した途端、硝子のようにひび割れて砕け散る。

「くそっ……！」

悪霊の腕が景臣を呑み込んだ。

「ぉっっ」

鈍い衝撃。景臣の身体が宙を舞う。時間だけがひどくゆっくりに感じられた。

美しい銀髪が空へ散り、血飛沫が紅く弧を描く。

景臣は、轟音とともに大木へ叩き付けられた。

「か、景臣さん……！　景臣さん‼」
抱き起こしても、景臣はぴくりとも動かない。額を伝う血が土へ落ち、瞼は閉じたままだ。
「景臣さん……！　しっかり‼」
蓮の叫びが森へ吸い込まれる。
あまりにも一瞬だった。本来、この樹木型の悪霊に、ここまでのスピードや力は無い。
「――隊長……」
神崎は侮っていた。
蓮が悪霊に与える影響を。
「さかきばら、隊長」
この呼び名は、かつてのもの。

もうずっと口にしていなかった、初めて呼んだ彼の名。
神崎はゆっくりと景臣へ視線を向け、続いて悪霊を見る。
見開かれた瞳から、一切の温度が消えた。
「……調子に乗りやがって」
地の底を這うような声。
双扇を閉じ、右手を軽く持ち上げるだけで、周囲の空気が震え始める。
木々がざわめき、地面の落ち葉が渦を巻いた。
「こん、クソダボがあぁっ！！！」
神崎の足元から無数の花弁が舞い上がる。
どれだけ怒り狂っていても、彼の術は何処までも美しい。そう感じた直後、その花弁は刃へ姿を変えた。
「――花嵐」

花吹雪が一斉に悪霊へ襲い掛かる。
触れた場所から幹が削れ、腕が裂け、黒い瘴気が噴き出していく。
花弁は悪霊だけではなく、周囲の木々さえ切り裂いていった。
幹が裂け、枝葉が吹き飛び、森そのものが悲鳴を上げるかのように騒めいた。
『ギッアアアアッ！！！』
逃げようと身を捩る悪霊に、花弁は執拗に纏わりつき、皮膚を削ぎ、肉へ食い込む。
森一帯が淡紅色に染まる。まるで春そのものが牙を剥いたようだ。
『アァァッ……ぁ……』
悪霊の悲鳴が途切れる。
巨大な身体は膝を折り、瘴気を撒き散らしながら崩れ落ちた。

「……クソッ……霊力が……」

扇を振り下ろそうとした腕が止まる。

「あかん……っ」

膝がぐらりと揺れ、肩で荒く息をする。

神格級の悪霊との戦闘直後の『花嵐』は、神崎にとっても消耗の激しい大術だった。

その上、怒りで我を失い、コントロールを失ったまま霊力を過剰に消費してしまった。

『……ア……アア……』

悪霊はなおも完全には滅びていない。

『……ま、ダダ……』

黒い蔦が最後の力を振り絞るように地中から伸び、神崎の背中へ迫った。

「神崎！」
咄嗟に手を伸ばすが、届かない。そう思った矢先、身体の奥が熱く疼いた。
「つぅっ……」
胸が張り、母乳が溢れる。
法衣がなくても、もう迷わなかった。
「喰らえ!!」
シャツの前を開き、叫んだ。
「母乳スプラッシュ！」
乳白色の奔流が一直線に放たれる。
温かな光は夜の森を照らし、神崎の肩越しを掠めて悪霊の霊核を貫いた。
『ギャッ!?　ああア……ぁぁ……ァ……』
黒い瘴気がぱあんっ！　と弾ける。

幹に浮かんでいた無数の顔が、苦しみから解放されたように穏やかな表情へ変わっていく。

『……ぁ……ぁ……』

やがて、溶けるように消えていった。

「はぁ……やっつけたよな……しんど……っ」

蓮のシャツの胸元は白く濡れ、荒い呼吸を繰り返している。

「そうだ、景臣さん……！」

安堵するのはまだ早い。ハッとして振り返ると、すでに神崎が景臣に付き添っていた。

気を失って倒れる景臣の乱れた前髪を、神崎が指でそっと払う。

その手付きが妙に優しくて、蓮は思わず立ち尽くしてしまった。

景臣の閉じた瞼は微動だにせず、呼吸だけがかすかに胸を上下させている。

こうして横たわっていると、精巧な西洋人形のようだ。

「チッ……くそが……」

神崎は景臣の背へ腕を回した。

「――花癒」

小さく唱えた術式に応えるように、柔らかな花弁がふたりの周囲を静かに舞い始めた。

荒々しく敵を切り裂いた花嵐とは違う。春風に乗って散る桜のように穏やかな花びらが、景臣の身体へ降り積もった。

「……う、」

額を流れていた血が止まり、裂けた皮膚が少しずつ塞がっていく。

長い睫毛がかすかに揺れ、苦しげだった呼吸も、ゆっくりと落ち着きを取り戻した。

「なぁ、景臣さんは大丈夫なのか」
「黙れ」
「お前さぁ！　さっきからいい加減に……っ、し、ろ……っ」
どくん、どくん、と頭の中で鼓動が鳴り響く。
足に力が入らない。内側が溢れる熱が下半身へ集まっていくのを感じた。
「ふっ……ぅ、んっ、うう……」
地面に身体を丸めてうずくまる。
誰にも触れられてないのに、全身がぞくぞくと震えた。
なんで。どうして。蓮の頭は疑問符で埋め尽くされる。
「さっきはなんともなかったのに……っ！」
今倒した樹木型の悪霊よりも、朔臣たちと祓った悪霊の方が強かった。
それなのに、あの時は大技を使っても副作用は起こらなかった。

あの時と今。違うのは、
「法衣……？」
装束を纏っていない。
「……っ、う、くぅ……！」
霊力を使った副作用。
神から身体を求められて疼く。母乳とともに、後孔から愛液が溢れ出るのがわかった。
「さ、朔臣……」
たまらず朔臣の名を呼ぶ。
涙で潤んだ視界、蓮を覗き込んだのは、神崎だった。
「なんや……オマエ、どないしてん」
「朔臣……呼んで……っ」

「あ〜？　なんで俺が使いっぱしりせなあかんねん。おら、さっさと立て」
「あ……っ！」
腕を引っ張られ、無理矢理立たされそうになった。
朔臣ではない男の手の熱に、身体が悦んで反応した。
神崎と目が合う。蓮の眉は下がり、薄く開いた口からは濡れた舌が覗く。
首の辺りまで真っ赤に染まった肌には、暑くもないのに汗が滲んでいた。
「そういえば……昼間の悪霊を祓ったあと、あのポンコツがやたらオマエのこと気にしとったな」
蓮の力は珍妙だが、強力な術だった。
あれだけの強い術を使うのに、蓮は修行や才があったようには見えない。
文字通り、『自分の身体と引き換えに』あの術を使っていたのだ。
「ちょうどいい、むしゃくしゃしとったんや」

「やっ」
「俺が相手したる」
「いやだ……っ！」
地面に押し倒され、神崎は強引に蓮の身体を暴いていく。
「アッ……！　んっ、んくっ……ふぁ……っ」
「なんやねんこれ。アイツ、涼しい顔してえらい粘着質やなぁ」
「痛っ……」
朔臣が残した痕を上書きするように、神崎が肌に吸いつき、噛みついて辿っていった。
痛いのに、それすらも快感に変わる自分の身体が恨めしい。
「やっ、やだ……っ！　はっ、ぁあっ」
「男のくせに濡れよるんか。便利やなぁ、聖乳サマの身体は」

下着の下に滑り込んできた手が尻たぶを掴み、秘所を探る。
泥濘みに指を突っ込まれ、蓮の身体から力が抜けていった。
「やぁらかいなぁ……。昨日もあのポンコツと寝たん？」
「あっ、あアッ！　やだっ、そこ……っ、やあぁっ！」
「お、イッたな。ナカ弄られてイクなんてもう雌やないか。なぁ、この身体使って、今まで何人落としてきたん？」
「……し、てな……っ」
「嘘つくなや。自分から腰振っておいて」
ぐちゅっじゅぷっと卑猥な音を立てて後孔が掻き回される。
一本だった指がいつの間にか三本に増えていた。
「なぁ……その中に、景臣さんはおるん？」
「ぁえ……？　かげ、ぉみさ……？」

蓮には、何故ここで景臣が出てくるのか分からなかった。
頭がぼうっとして、身体がどんどん疼いていくばかりだ。
足りない。そう言いそうになって唇を噛んだ。指じゃ足りない。もっと太くて、硬くて、凶暴なモノがいい。
「……物欲しそうな顔しやがって」
「あっ」
「その顔、朔臣のヤツに見せてやりたいなぁ。アイツ、悔しがるやろなぁ。最ッ高や……」
神崎の低く嗤う声が何処か遠くに聞こえる。
「朔臣……」
「あ？」
「朔臣がいい……朔臣ぃ……っ」

ボロボロと泣き出した蓮に、神崎は興を削がれたかのように舌打ちした。
「んあっ」
乱暴に指を引き抜き、下帯をゆるめる。
「おら、ケツ上げろ」
蓮をうつ伏せにし、尻を上げさせた。
すっかり濡れそぼった粘膜はぽってりと熟れ、外気に触れてひくひくと男を誘う。
神崎は自身の手のひらに唾を吐き、屹立を何度か扱いた。
芯を持ったソレをぴたりと粘膜に当てがい、不遜に嗤う。
「さぁ……どないする？　俺はこのまま動かへんでぇ。欲しかったらお前から来いや」
「あ……っ、は、うぅっ」

「俺がお前を奪うんやない。お前が朔臣を裏切るんや」
粘膜が触れている。どくどくと頭の中がうるさい。あと少し腰を落とせば、蓮は欲しかった快楽を得ることができる。
「う、うう……くっ」
ぶるぶると全身が震え、飢えた犬のように唾液が溢れる。
身体が勝手に動いてしまいそうだ。
「は……っ、はぁっ、はぁっ」
僅かに腰が動いた。より一層男根の感触が強くなる。神崎がくっと喉奥で嗤った。その時だった。
「――縛……！」
「ぐっ」
神崎の身体が離れ、地面に倒れる音がした。

訳もわからず声のした方を見ると、景臣がこちらに向けて手を伸ばしていた。拘束の術を発動したのだ。

「かげ、おみさ……？」

「蒼士……お前……何をしている」

ゆっくりと立ち上がった景臣は、失血で真っ青な顔をしていた。

ぜい、と肩で荒く息をしながらも、その瞳だけは鋭く神崎を射抜いている。

景臣はふらつく足取りで歩み寄り、神崎の胸ぐらを掴んだ。

「答えろッ!!」

いつも柔和で、誰に対しても穏やかな景臣が、人を乱暴に組み伏せるなど想像もできなかった。

霊力が限界を超えたのか、拘束の術はすぐに解けた。

身体が自由になっても、神崎は抵抗しようとしなかった。

「蒼士……っ」
景臣の銀髪がさらりと頬へかかる。額から流れる血が神崎の隊服へぽたりと落ちた。
「隊長。」
うっとりと、神崎は微笑んだ。
その笑みに嫌味は一切ない。まるで少年のような純粋な笑みだ。
神崎は、自分の胸ぐらを掴む景臣を見つめる。
指先に付着した血。震える拳。乱れた呼吸。月光色の髪に、薄青色の瞳。
その全部を、愛おしむように眺めていた。
やがて、ゆっくりと景臣へ視線を戻す。
「……嗚呼、また名前で呼んでもらえて嬉しいです」
歌うように、夢見るように。その言葉に、景臣は目を見開いて硬直した。

確かに、神崎が西部を離れてから、彼のことは苗字で呼んでいたが、それが何だというのか。

「お前……一体……っつ」

傷が痛んで膝をつく。神崎が何を考えているのか、景臣にはまったくわからない。

痛みに呻く景臣を、神崎は感情を読ませない瞳で食い入るように見つめている。

「く……っ」

視界が狭まり、意識が遠のく。

微かに隊員たちの声が聞こえるのは幻聴だろうか。

意識を失うその刹那まで、神崎はずうっと、景臣だけを見つめていた。

# 第十四話　亡者の海。

私室へ戻った後も、神崎は扉を閉めたまま、しばらく動けなかった。
厚い木戸の向こうで、廊下を行き交う足音がかすかに響いている。
それらはすべて、扉一枚を隔てただけでひどく遠くに感じた。
今夜は月も無い、静かな夜だ。
ゆっくりと羽織を脱ぐ。布が肩から滑り落ちる、そのわずかな音がやけに大きく聞こえた。
「これは……」
袖を抜いた瞬間、視界の端に赤黒く乾いた染みが映る。

まだ湿り気を残しているように見えるほど濃く、布地に深く食い込んでいた。

「あの人の血ぃや……」

それは、景臣の血だった。

袖口にも、胸元にも、ところどころ飛び散るように付いている。腕に抱えたときに移ったものだ。

これが自分や他人の血なら、すぐに「汚い」と言って投げ捨てていただろう。

「めちゃくちゃキレとったなぁ。俺が西部を追い出された時みたいやった」

染みの輪郭をなぞるだけで、胸の奥がひどくざわつく。

羽織を机に広げ、上半身を屈めた。

布地に鼻先を突っ込み、深く息を吸う。

「嗚呼……あの人の血の匂い……」
脳裏に、あの光景が焼きついている。
大木へ叩き付けられた細い身体。白くなった顔。額を流れる血に染まる銀糸の髪。
呼び掛けても返事はなく、抱き起こした身体はひどく軽かった。
腕の中で感じたその軽さだけが、妙に現実味を帯びて残っている。
「……はっ、はっ、はっ」
血の匂いにひどく興奮する。
腹につくぐらいにそそり立った性器を、がしがしと乱暴にしごいた。
べろり。舌を限界まで伸ばして血を舐める。
自分の唾液ごと血をじゅるじゅると吸った。
「……うっ」

あっという間に達し、羽織に精液をかける。
あの清廉な景臣を自分の体液で汚したかのような背徳感に、背筋がぞくぞくと震えた。
「あかん……全然おさまらへん」
そのまま机の引き出しを開け、梔子色の組紐を取り出した。
それは、何年も前の訓練中に切れてしまい、もう使い物にならないからと景臣が捨ててしまった髪紐だ。
「……はぁ、隊長……」
何の未練もなく髪紐を屑籠に捨てた景臣。あの光景がいつまで経っても忘れられずにいる。
まだ完勃ち状態の性器の根元に、色褪せた髪紐をキツく括りつける。
「うぐ……っ」

そこに景臣の温もりなど残っているはずもない。
それでも良かった。
「ぁ……っ、はぁっ、う、隊長……っ、隊長……っ」
どれだけ刺激を与えても、根元を縛っているせいで射精できない。
ぐるぐると、気が狂いそうなほどの快感を、神崎はいつまでも味わっていた。